

K-687

河北町埋蔵文化財調査報告書第3集

月山堂遺跡

発掘調査報告書

1982

河北町教育委員会

月山堂遺跡

発掘調査報告書

昭和57年3月

序

本報告書は、昭和56年度に実施した、河北町字月山堂地内「月山堂遺跡」（山形県446）の発掘調査結果をまとめたものである。

県営圃場整備事業の進捗に伴ない、緊急発掘調査が進められたが、町教育委員会としては、馬場、一の坪の発掘調査しか調査事例がなく、今回も県教育庁文化課の指導に俟ったところもある。特に、古墳と見られる塚の周溝の検討については、掘削方法による調査しかなく、山形県村山西部土地改良事務所や西村山郡大堀土地改良区などに多大のご迷惑をおかけしたこと、紙上をもって謝意を申し上げる次第である。

遺構を概観するに、馬場遺跡、一の坪遺跡と同じく、寒河江川沖積地の微高地に位しているが、時代はやや下がるものとみられる。出土品の中に、赤焼き土器の馬形把手や墨書き土器が発見されたが、内容については今後の研究に俟つべきものが多い。

昭和56年8月6日には、「第3回町民参加発掘の日」を設定し、体験学習を企画したが、町の郷土史研究会員、文化教室の郷土史学級生を始め、夏休み期間中のこととて、小・中学生の参加もあり、盛況のうちに調査に協力していただいたことに、文化の町「河北町」の側面を発見した次第である。調査終了後、現地において、県立米沢女子短期大学学長柏倉亮吉先生の「大山郷と一の坪の成立」についてのご講演があり、今後の町誌編纂事業の有力な基いとなったことも併せて謝意を申し上げます。

終りに、炎暑のなかに発掘調査に協力していただいた調査員、作業員各位に深謝申し上げる次第である。

昭和57年3月

河北町教育委員会教育長

細矢敏雄

例　　言

1. 本報告書は、河北町教育委員会が、昭和56年度に実施した「県営圃場整備事業にかかる大堰第2地区の緊急発掘調査」の報告書である。

2. 発掘調査は、河北町教育委員会社会教育課が当り、調査期間は、昭和56年7月13日より、8月31日までである。

3. 調査員は下記のとおりである。

野川主計　　河北町文化財調査委員
高橋郁夫　　寒河江市立陵南中学校教諭

4. 事務体制は、次の者が担当した。

総括　森谷啓助　　社会教育課長
庶務　小野博敏　　社会教育係長
　　　小林久雄　　社会教育主事
　　　高橋紀子　　社会教育課
指導　浅黄三治　　中央公民館長

5. 遺構の挿図、拓影図、写真は本文と同様記号で示し、出土した遺物は原寸の $\frac{1}{3}$ を基本とした。

6. 本報告書の作成にあたって、文章の執筆は、野川主計、高橋郁夫が分担し、挿図及び写真は、小野孝良、浅黄透があたり、編集は浅黄三治が担当した。なお、遺物の復元については、野川主計があたった。

目 次

I 調査の経緯	
1. 発掘調査にいたるまでの経緯	2
2. 調査団の編成	2
3. 調査日程	2
II 遺跡の概観	
1. 遺跡の立地と環境	4
2. 遺跡の層序	7
III 発見された遺構	9
IV 出土した遺物	13
V まとめ	24

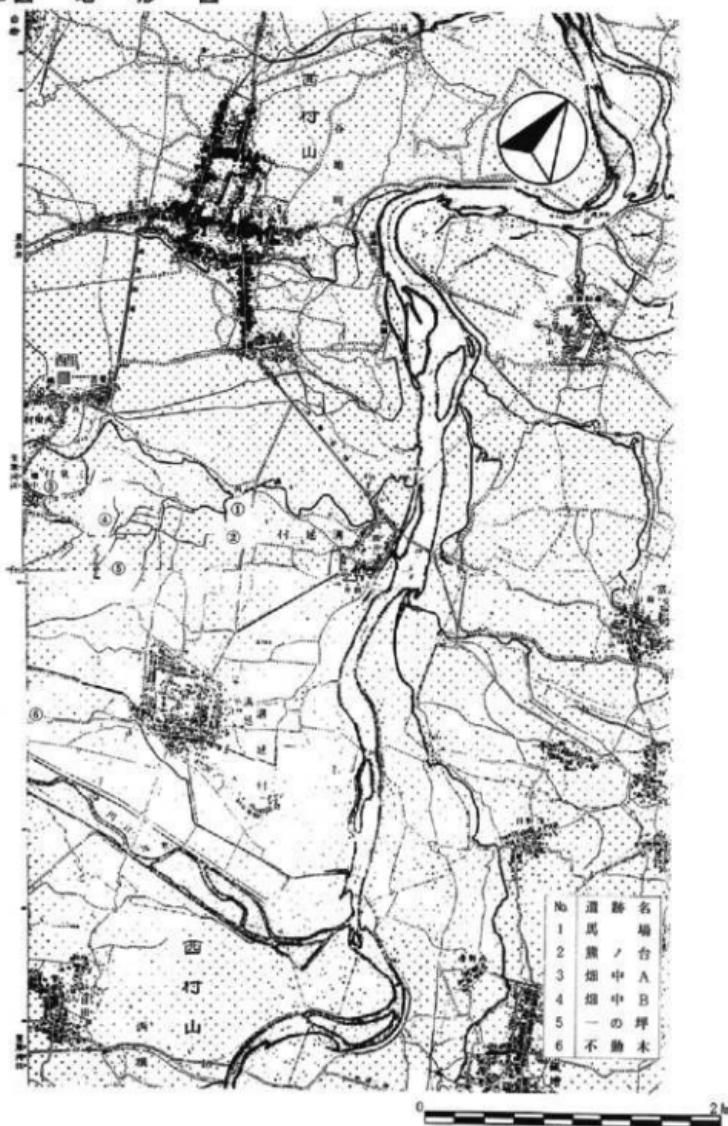
挿 図 目 次

第1図 地形図	1
第2図 B地区全体概略図	6
第3図 土層図	8
第4図 B地区第13号、14号、住居跡	11
第5図 A地区第5号、6号住居跡	12
第6図 実測図 (1)	19
第7図 ノ (2)	20
第8図 ノ (3)	21
第9図 ノ (4)	22
土器出土地区分類表	23

図版目次

図版 1. 調査区全景（鍬入式、B地区トレンチ、A地区荒掘）	26
図版 2. 精査作業、出土状況	27
図版 3. 発掘風景（町民参加発掘、現地説明会風景）	28
図版 4. 復元土器（壺類）	29
図版 5. 復元土器（甕類）	30
図版 6. 復元土器（甕、砥石、植物種子、古錢等）	31

第1図 地形図



明治37年陸地測量部発行

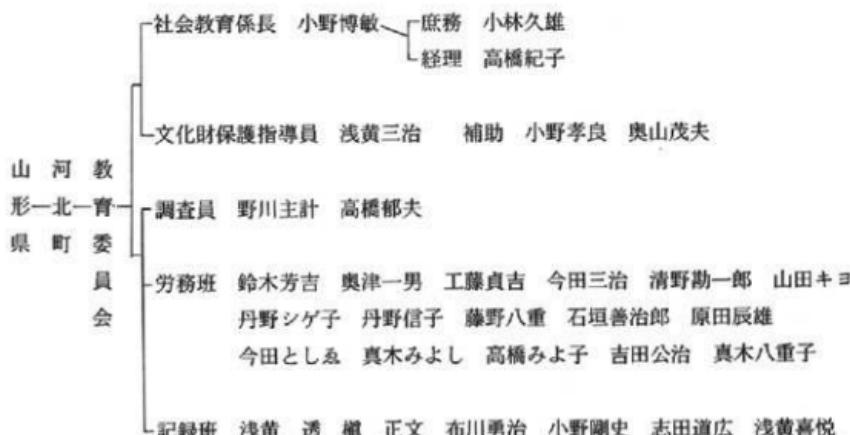
I 調査の経緯

1. 発掘調査に至るまでの経緯

河北町谷地「月山堂遺跡」については、月山堂東方を耕作する農民から、遺物の発見の報告が、昭和32～3年頃になされている。また、昭和38年発行の「山形県遺跡地名表」に記載されており、県営圃場整備事業の進捗に伴い、昭和55年10月22日山形県教育庁文化課によって事前調査が行われた。その結果、馬形把手ほか壊の一部が発見され、圃場整備の前提条件である仮排水路の設定が協議され、更に、関係機関の協議を進め緊急調査を実施することになった。

2. 調査団の編成

遺跡調査の万全を期するため、次のような組織を編成し、責任体制を明確なものにした。



3. 調査日程

- 7月9日 調査日程打合
10日 調査事務所建設

- 7月13日 繳入式
15日 器材搬入、トレンチ開始
17日 重機荒削り
20日 面整理
27日 精査
- 8月 6日 町民参加発掘の日
7日 精査
19日 実測
24日 記録写真撮影
29日 現地説明会
31日 調査終了、器材撤収

I 遺跡の概観

1. 遺跡の立地と環境

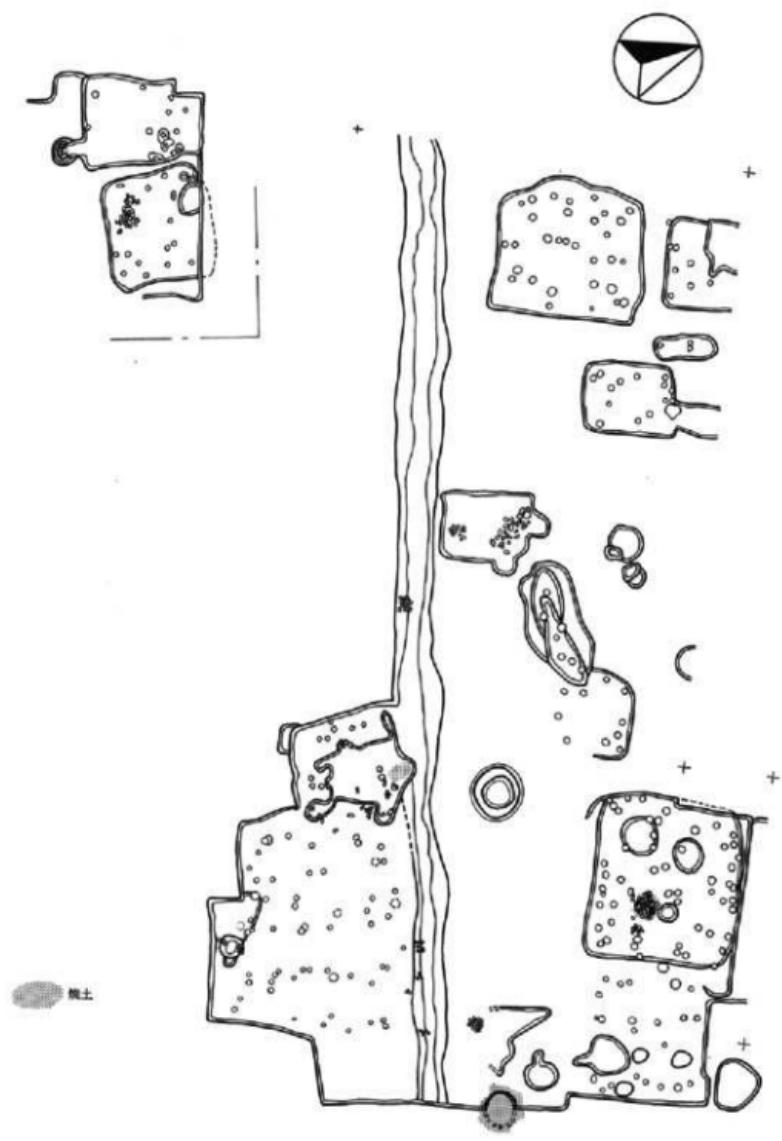
米沢盆地を北流した最上川が、朝日町から山形盆地に入ると、大江町附近で流れを急に東にかえはじめる。天童市寺津で再び北流をはじめ、川幅も増してくる。まもなく支流寒河江川が本流と合流する。寒河江川の合流のしかたが、他の支流と異なっている。通常は本流の川下の方向に合流するが、寒河江川の場合は川上の方向に合流している。このことは最上川が大江町から東流する事実とあわせて説明できる。朝日山地を源流とした寒河江川が山形盆地に入ると扇状地を形成している。扇状地を流下する河川の特徴として、この寒河江川はかなりの「暴れ川」でたまたま流路を変えている。その証左として、旧河道跡と考えられるものは、寒河江市洲崎から落衣の東側にその痕跡がみられる。寒河江市の南部に高瀬山があり、孤立丘の様相を呈しているが、最上川の形成した河岸段丘である。この高瀬山の西側を寒河江川が流れていったために、孤立丘を呈するようになったものと考えられる。寒河江川扇状地は寒河江市宮内を扇頂としている。扇端については最上川の氾濫原と複雑に入り組んで判然としないが、寒河江市高屋・本楯・日田・河北町溝延を結ぶ線と思われる。この扇状地は右岸の乱川扇状地と異なり、勾配が緩く保水力が強いので扇央から扇端にかけては良好な水田地帯となっている。最上川の氾濫原は、最近の研究によると、両岸で標高90m以下になるらしい。

こうした自然環境が古代の集落にどのような影響を与えたのか興味の深い問題である。月山堂遺跡は標高89mで国道287号線高闘交差点の南南西約300mのところに位置している。遺跡の南約500mのところを横川が流れしており、この横川から本町にかけてやや緩い勾配の途中に遺跡が位置している。

近辺には月山堂遺跡の南約600mのところに、54年度に町教委が発掘調査した馬場遺跡、県教委が発掘調査した熊野台遺跡がある。この両遺跡は調査の結果、古墳時代から平安時代後葉にわたる集落跡と判明した。また、55年度には、畠中（一の坪）遺跡が町教委によって発掘調査されて、奈良時代から平安時代にわたる集落跡であることがわかった。この「一の坪」は、柏倉・今田両氏の業績によって、文献上から条里制が存在することが推定された。調査の結果、条里制構造は確認することはできなかったが、多くの墨書き器が発見され、その中に「大」、「大山」が判読できるものがあった。これが「大山郷」をあらわすものと推定すれば、この地を「大山郷」に比定できる。

しかし、異論もある。この他にも、現在の水田面に下横（古墳～平安）・荒町（平安）

所岡（平安）・^{ウツラギ}不動木（平安？）などの集落が営まれ、消滅していった歴史が次第に明らかにされてきている。



第2図 B地区全体概略図

2. 遺跡の層序

遺跡は西から東に緩く勾配が続く面に広がっている。遺跡の立地している地層はすべて沖積面で、土層確認のためにA地区NO1の南側壁を観察した。大よそは5層に分けられるが9層に分類した。

<第Ⅰ層>

第Ⅰ層は、現在の水田の耕作土で、暗褐色を呈する。層の厚さは10～18cmではほぼ均等に分布している。土質は微砂質の粘土でしまりがあり、わずかに酸化物・炭化物の混入がみられる。

<第Ⅱ層>

第Ⅱ層は、暗褐色を呈し、厚さは5～10cmである。土質は第Ⅰ層と同じであるが、酸化物の混入がみられる。この層から遺物が出土するようになる。

<第Ⅲ層>

第Ⅲ層は、灰褐色を呈し、厚さは3～11cmである。土質は第Ⅱ層と同じであるが、酸化物の混入がやや多くなっている。

<第Ⅳ層>

第Ⅳ層は、暗灰褐色を呈し、厚さは3～4cmで途中で途切れる。土質は第Ⅲ層と同じである。

<第Ⅴ層>

第Ⅴ層は、淡灰褐色を呈するシルト層で層の厚さ4～15cmである。酸化物の混入がみられ、しまりがある。無遺物層。

<第Ⅵ層>

第Ⅵ層は、暗茶褐色を呈し、しまりがある。酸化物の混入があり、わずかに炭化物とこぶし大の礫が散見される。土質は微砂質土である。無遺物層で以下同じ。

<第Ⅶ層>

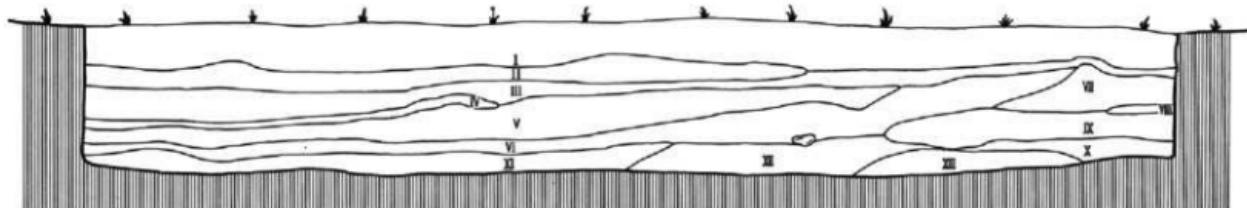
第Ⅶ層は暗灰褐色を呈する微砂質土で、しまりがある。厚さは4～15cmで酸化物と第Ⅵ層の土が全体的に混入している。

<第Ⅷ層>

第Ⅷ層は灰褐色を呈するシルト層で、しまりがある。酸化物の混入がみられる。

<第Ⅸ層>～<第XIII層>

第Ⅸ層から第XIII層はシルト層で、色調の差によって分類したが、無遺物層である。



第Ⅰ層	耕作土	微砂質
第Ⅱ層	暗褐色土	微砂質
第Ⅲ層	灰褐色土	微砂質
第Ⅳ層	暗灰褐色土	微砂質
第Ⅴ層	淡灰褐色土	シルト
第Ⅵ層	暗茶褐色土	微砂質
第Ⅶ層	暗灰褐色土	微砂質
第Ⅷ層	灰褐色土	シルト
第Ⅸ層	赤茶褐色土	微砂質
第Ⅹ層	黒褐色土	シルト
第Ⅺ層	黑灰褐色土	シルト
第Ⅻ層	黑灰褐色土	微砂質
第Ⅼ層	綠灰褐色土	シルト



第3図 土層図

III 発見された遺構

今回の調査で発見された遺構は、堅穴式住居跡・カマド跡・炉跡・井戸跡・土壌・溝跡などである。

(A地区)

1号住居跡

A-15地区で、平面プランが検出された段階で内面から多量の炭化物が発見された。生活面まで掘りさげると、微砂質土の層が一枚入っており住居跡との関連はなかった。内部に柱穴が8個あり、東側の柱列は磁北より約30度西にずれている。柱穴の大きさは、12cmから22cmまでである。側壁のたちあがりは12cmであった。内部にひょうたん型の土壌が検出されたが、焼土・炭化物がみられないために炉跡とは考えられず、貯蔵穴である。カマドは付随していなかった。

5号住居跡

A-13地区で、3棟住居跡が発見されているが、5号住居跡が明瞭に確認できた。住居プランは、東西1.6m、南北1.5mではほぼ正方形の隅丸である。内部に4本の柱穴があった。柱穴の大きさは14~17cmまでである。東壁にカマドが設けられ、焚口部に卵大的河原石がしきつめられ、煙道の一部が住居内にくいこんでいるが、煙出部は住居外に出ている。

この住居跡の南側に6号住居跡があるが、その下に切りあった住居跡が検出されている。時期的にそれほど差はみられない。

(B地区)

13号住居跡

B-1地区に2棟発見されたうちの1つである。住居プランは東西1.5m、南北1.5mの正方形である。内部に9本の柱穴がみられ、中央部にはない。周壁のたちあがりは約15cmである。住居の南側の東端にカマドが設けられている。カマドの内部に根固めの河原石が2個検出された。

カマド跡

B地区で3ヵ所のカマド跡が発見されている。B-6で発見されたカマドが明瞭である。焚口部に子供の頭大の河原石を2コ並べ、それから煙道までの内部の下部に礫をしいて、粘土で構築されている。これに伴う住居跡は、明確にできなかった。

井戸跡

B地区の中央東寄りに発見されたもので、直径約1m、深さ1.3mの規模である。内部には土崩れを防ぐため(?)、竹のタガがらせん状に一本めぐらされていた。井戸上部の粘土部が、平安時代の住居面よりもかなり上位にあり、竹の腐蝕状態もすすんでおらず比較的に新しい時期と考えられる。

溝跡

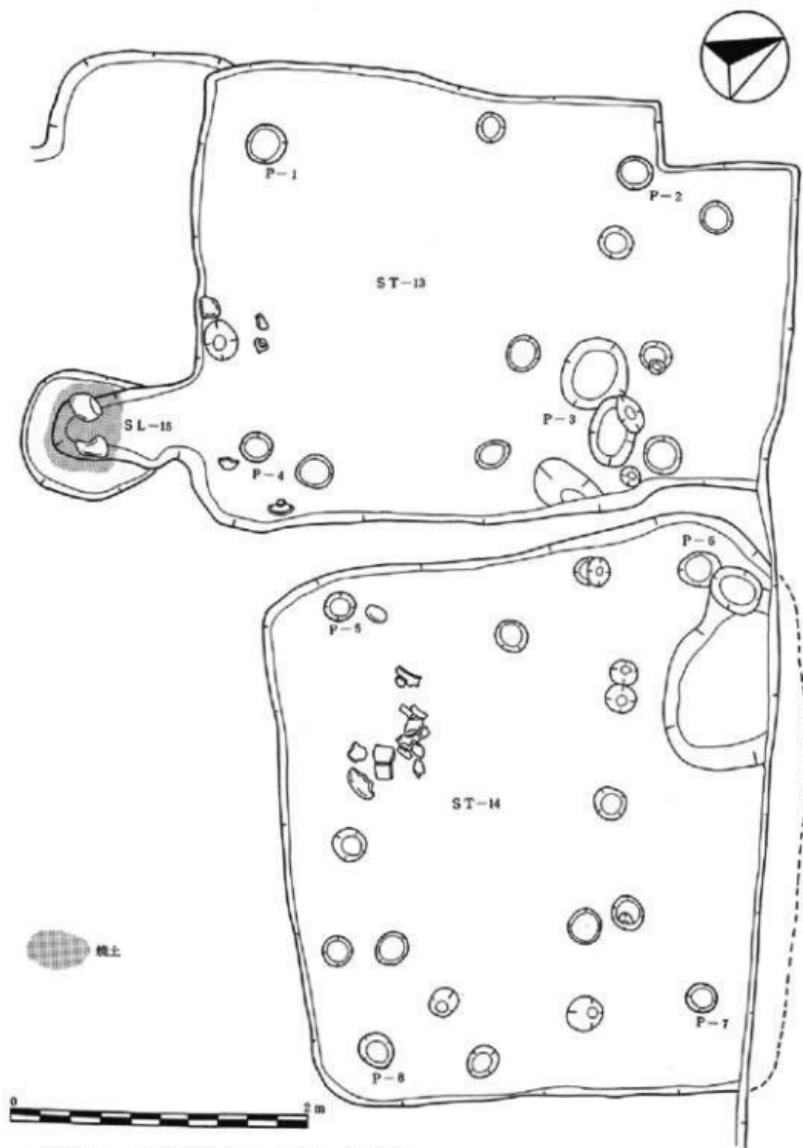
B地区のグリッドの西南西から東北東にかけて、幅約80cmの大溝跡が斜めに横断している。この溝跡と切り合って下位に平安時代のカマド跡があるために、鎌倉時代以降にくだると考えられる。

月山堂塚

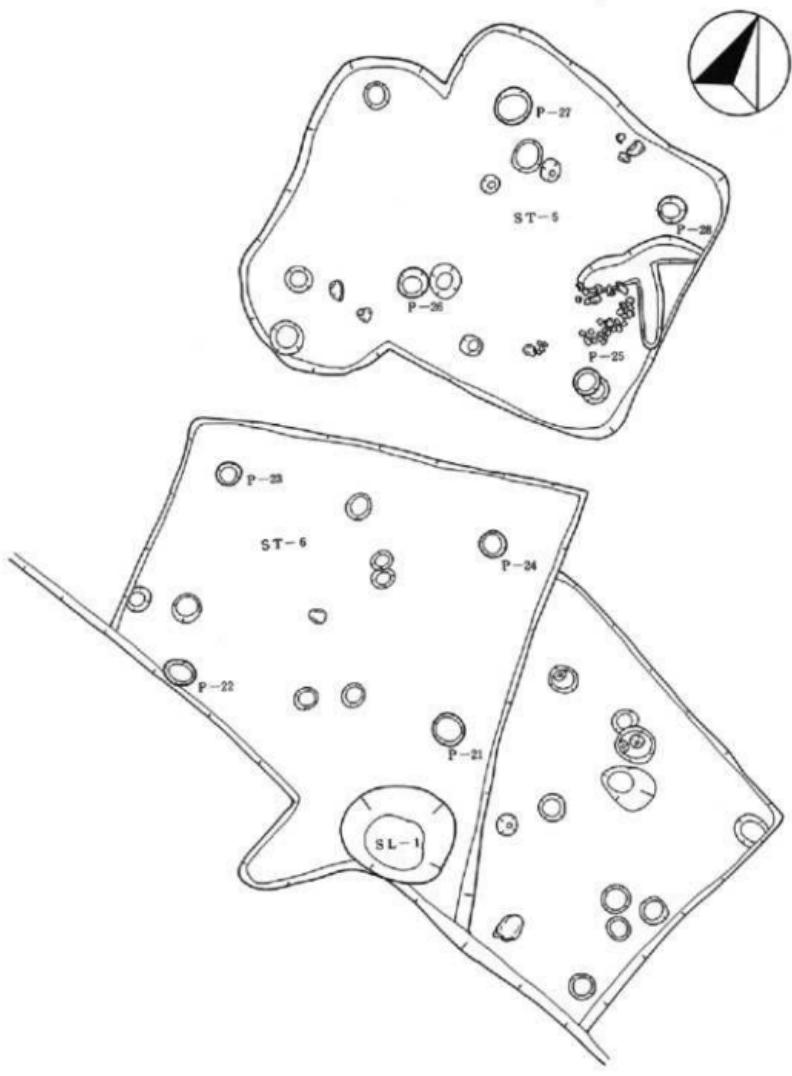
月山堂とよばれる塚は、頂上に月山大権現が祀られており、五輪塔の頭部も発見されている。この塚を中心として、東西南北と南東に、幅1.5m、長さ10mのトレンチを入れてみた。縁辺から4~5mのところに周溝と考えられる落ちこみが断面にみられた。主体部の調査をしていないために明確ではないが、古墳または中世墳墓と考えられる。

土壙

B-7地区の東端にピットが発見されたが、内部に多量の焼土と坏が3枚重なったものと土器片が多くあったために、いわゆる赤焼き土器のカマ場と考えられる。



第4図 B地区第13号、14号、住居跡



第5図 A地区第5号、6号住居跡

IV 出土した遺物

発掘された遺物は整理箱にして 50 箱程度であるが、他に古錢、植物の種子、石製品、等で遺構や土壤から炭化物と共に検出されている。土器は完形の物が少なく、復元によるものが大部分である。その他復元可能な物、口縁部、底部、等の破片 20 個、残部破片 500 枚程度である。ポリ袋に入れ保存する。年代的には奈良時代後葉（9世紀）～平安時代後半（11世紀）に至る今から約 1,000 年前の長い期間の土器が検出されている。

土器が使用されたのは今から、約 7,000 年前縄文時代の人達によって創作され、それに続いて弥生式土器と共に発達した土師器は茶褐色と赤っぽい色の素焼土器総称である。

成形から調整にかけて粘土紐を巻上げ、又は輪積法などの原始的な技法で成形され、次第に回転ロクロが使用され底部の切り離しに糸切りの痕があり調整が施されている、巻上げ技法には底部に木葉痕又は蓮目痕があり、横縦の櫛目が多く使用されている。

胎土は荒土の粘土を用いている。

ロクロ調整の土器は胎土も良質の粘土を使用し、成形にはヘラ削りが多く検出されている。土器の大半は煮炊用の食器が多く、壺、甕、壺、瓶、等で祭祀用には高台付壺、壺、皿、等があり調整による文様は、刷毛目、櫛目、籠目、蓮目、木葉痕、等が多く、須恵器には、円心文、籠目、叩目、等が多く検出されている。

焼成は酸化焰によるもので、700 度前後の温度で焼成され、色調は黄赤色又は茶褐色、灰褐色を呈す。同時代に内黒色土器も製作され数多く検出されている。土師器の質度は軟質である。

須恵器、この土器は古墳時代五世紀頃に、中国、朝鮮～方面からその技術と共に伝えられた土器であり、奈良時代中葉から～平安時代後葉にかけて盛んに製作されて、質も硬く、調整にはロクロを使用し底部はヘラ削り、糸切り等で色調は青灰色又は灰褐色、灰白色を呈し焼成は登窯を使用し還元焰焼成である。温度は 1,200 度前後の温度で焼成されている。

器体の大きい物は土器の表面と器内面に叩き目が施されている。波状文、櫛目文、蓮目文、縦横斜線文等の圧痕が施され、器内側に円心文、籠目文、等の叩き目が多く使用されている。底部はヘラ切り、糸切りでロクロから切り離している。甕、壺、等の口縁部又は肩部などに波状文を施した土器も多く検出されその一例として、実測図に示す。

記号

S T—堅穴	S B—建物	S D—溝
S P—ピット	S L—炉	S K—土壤
R P—土製	R M—金属	R Q—石製
R W—木製	R N—自然物	R T—瓦塊

実測第1図 説明

R P、B-6、S T-11 坯 Ⅲ

土師器、底径 6.0 cm 器高 4.7 cm 口径 1.5.2 cm 器厚 0.4 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用、底部ヘラ削り調整、焼成軟質、色調茶褐色器内黒色を呈す、復元

R P、B-7、S T-1 B 坯 Ⅲ

須恵器、底径 6.5 cm 器高 3.9 cm 口径 1.3.1 cm 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用、底部糸切り調整、焼成硬質、色調青灰色を呈す、完形土器

R P、B-6、S T-11A 坯 Ⅲ

須恵器、底部丸底、器高 3.9 cm 口径 1.4.5 cm 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用、底部ヘラ削り調整、焼成硬質、色調灰白色を呈す、復元

R P、B-7、S T-1 B 坯底部 拓影

R P、A-13-7 S L-2 坯底部 拓影

R P、A-13-7 S L-2 坯 Ⅲ

土師器、高台付坯、内黒、底径 7.5 cm 器高 6.0 cm 口径 1.4.7 cm 高台 1.0 cm 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用ヘラ削り調整、焼成軟質、色調茶褐色器内黒色を呈す、復元

R P、A-14、坯 Ⅲ

須恵器、高台付坯、底径 9.0 cm 器高 4.8 cm 口径 1.3.9 cm 器厚 0.4 ~ 0.5 cm 高台 1.0 cm を測る、成形ロクロ使用、底部ヘラ削り調整、焼成硬質、色調青灰色を呈す、復元

R P、A-13-7 S L-2 坯 Ⅲ

須恵器、底径 6.5 cm 器高 4.5 cm 口径 1.3.7 cm 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用、底部糸切り調整、焼成硬質、色調青灰色を呈す、墨書（申） 復元

R P、A-15 坯 Ⅲ

須恵器、底径 7.9 cm 器高 4.0 cm 口径 1.2.8 cm 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形ロクロ使用底部ヘラ削り調整、焼成硬質、色調青灰色を呈す、復元

R P、A-15 坯、底部 拓影

実測第2図 説明

R P、A-5 置 底部 Ⅲ

土師器、底径 9.5 cm 器高 0 口径 0 器厚 0.3 ~ 0.5 cm を測る、成形手作り技法、櫛目調整、底部木葉痕、器内、横櫛目があり焼成やや硬質で色調は茶褐色を呈す、復元

R P、20 B-6 S T-11 Ⅲ

土師器、長胴置 底径 8.5 cm 器高 3.5 cm 口径 2.2 cm 器厚 0.4 cm ~ 0.9 cm 成形ロクロ使用ヘラ削り調整底部ヘラ削り色調茶褐色を呈す、復元

この器種に属する物Ⅱ層下から多く検出され平安中期に属するかと思う。

R P、A-13SL-3 坝 Ⅲ

土師器、小形壺、底径6.5cm器高9cm口径9cm器厚0.2~0.4cmを測る、成形手作技法で器表胴部は縦に櫛目があり口縁部と底部に横に櫛目調整が施されている。器内横に櫛目が施されている底部は蓮目圧痕で色調は黒味茶褐色を呈す、復元。

この土器は面に祭祀用に使われている場合が多い。

R P、A-13SL3 坝底部 拓影

R P、A-5壺底部 拓影

R P、20B-6ST-11 壺底部 拓影

実測第3図 説明

R P、B-7ST-2 壺 Ⅲ

土師器、小形壺、底径7.5cm器高13.2cm口径10.7cm器厚0.3~0.5cmを測る、成形粘土紐積上げ技法で調整され、器表は縦、斜、に櫛目があり、器内部はナデ仕上げ、底部木葉圧痕で焼成軟質である。色調茶褐色を呈す。復元。

R P、B-7SL-1 壺 Ⅲ

土師器、大形壺、底径10.5cm器高29cm口径21.5cm器厚0.4cm~0.5cmを測る。成形粘土紐積上げ技法で調整され、器表に縦に櫛目があり口縁部下6cmの処に横に波形櫛目が施されている。器内は横に櫛目があり、底部は蓮目圧痕である。焼成は軟質で色調茶褐色を呈す。復元。

R P、B-6ST-11 壺 Ⅲ

土師器、中形壺、底径9cm器高18.5cm口径16cm器厚0.3~0.4cmを測る。成形にロクロ使用底部ヘラ削り調整、焼成軟質で色調は茶褐色を呈す。この技法の土師器は出土数の約半数を占める。復元。

R P、B-7ST-2 小形壺底部 拓影

R P、B-7SL-1 大形壺底部 拓影

実測第4図 説明

R P、A-5SK-2 壺 破片

R P、A-5 " "

R P、B-4 " "

須恵器、大形の壺、壺、等の破片である口縁部下に残る波状文は古くは奈良時代(7世紀)頃から平安時代(9世紀)頃にかけて多く検出され、一の坪遺跡からは数多く検出され、月山堂遺跡では其の一例として図に示す。

R P、A-4 SK 壺 頸部破片

R P、B-西 III " "

R P、B-5 SK " "

須恵器、壺頸部破片である出土数から壺破片12個分の破片が検出され、復元不可能に近くボリ袋に入れ保存する。年代的に9世紀後葉と考えられる。

R P、B-1 环 破片 墨書 (井)

R P、A-5 " " " (吉)

墨書土器、計21個を数え復元によるもの環11個、その他、小破片であるその中で(申)が最も多く11個ありその他、万、宜、井、等で不明文字もあり今後の研究による。

R Q、A-4 ST-3 石印 III

印章形石製品、A-ST3竪穴住居内より検出され、上部に紐を通す穴があり、材質は磁石に類する石材で軟質で印面は削られて居り、色は灰白色を呈す。(実測図参照)

その他の出土品

R T、B-6、B-30 破片 III

溝跡より白磁破片が検出され、三脚付段皿の破片である事が確認され、平安時代(10世紀)後葉頃のもので皿の内面に黄緑色の灰釉があり、外面は素肌のままで白色を呈す。底部に三つの小さい足が付いている。

R Q、A-13 磁石 III

R Q、A-4 ST-3 磁石

R Q、B-5 磁石 II

磁石は各1個ずつ出土しているが、いずれも同時代頃のものと推定される。

R M、B-4-5 古銭 III

大溝跡のII層下から検出され、中国宋時代に鋳造された銭で日本には室町時代に渡ったものであろうと推定される。天聖元宝、洪武通宝、(1368)

炭化物

R W、B-SG 木片 針葉樹 10本

" " 大小 15本

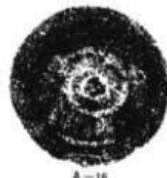
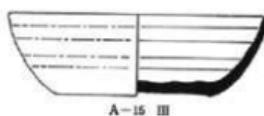
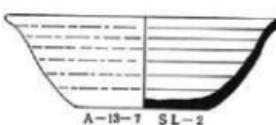
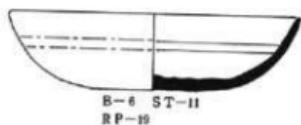
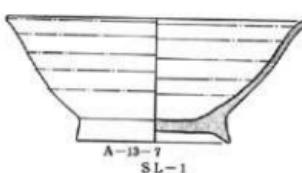
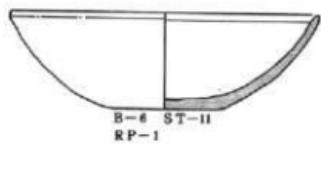
R W、B-SG-SE-1 竹 タガ 6本

R W、B-6 III 木炭 3個

R N、B-4 SG 淡水貝 5個

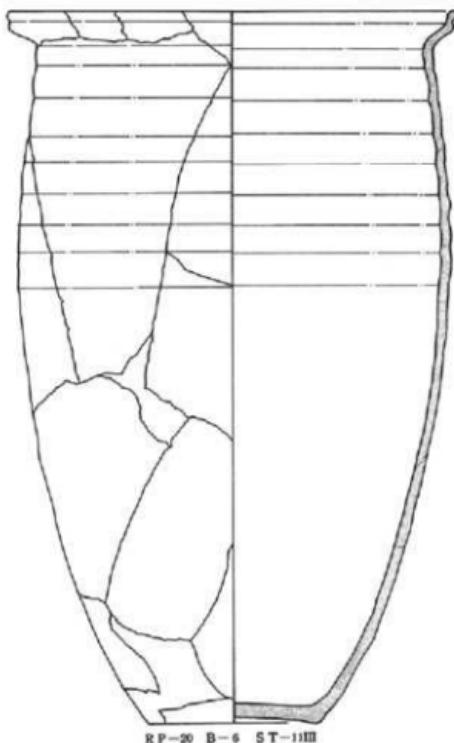
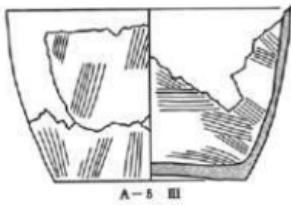
R N、B-6 ST-12 モノタネ 2個

R N、B-1 III モモノタネ 3個
R N、B-5 II クルミ 2個
R N、B-4 SG-2 クルミ 2個
R N、B-6 ST-12 炭化米 50粒
R N、" " " 炭化米 30粒



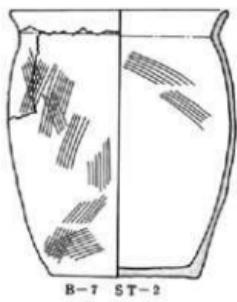
第6図 実測図(1)



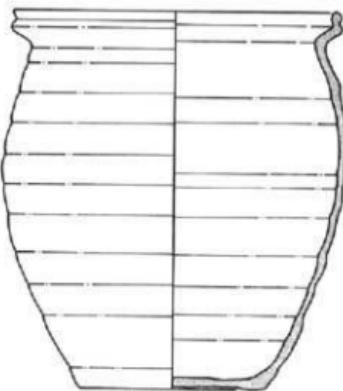


0 10 cm

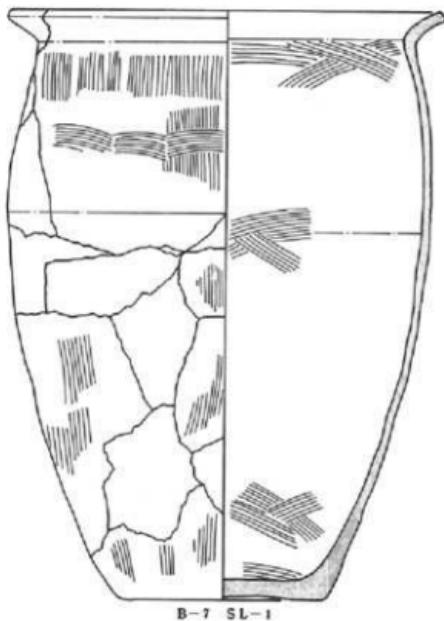
第7図 実測図（2）



B-7 ST-2



B-6 ST-11



B-7 SL-1



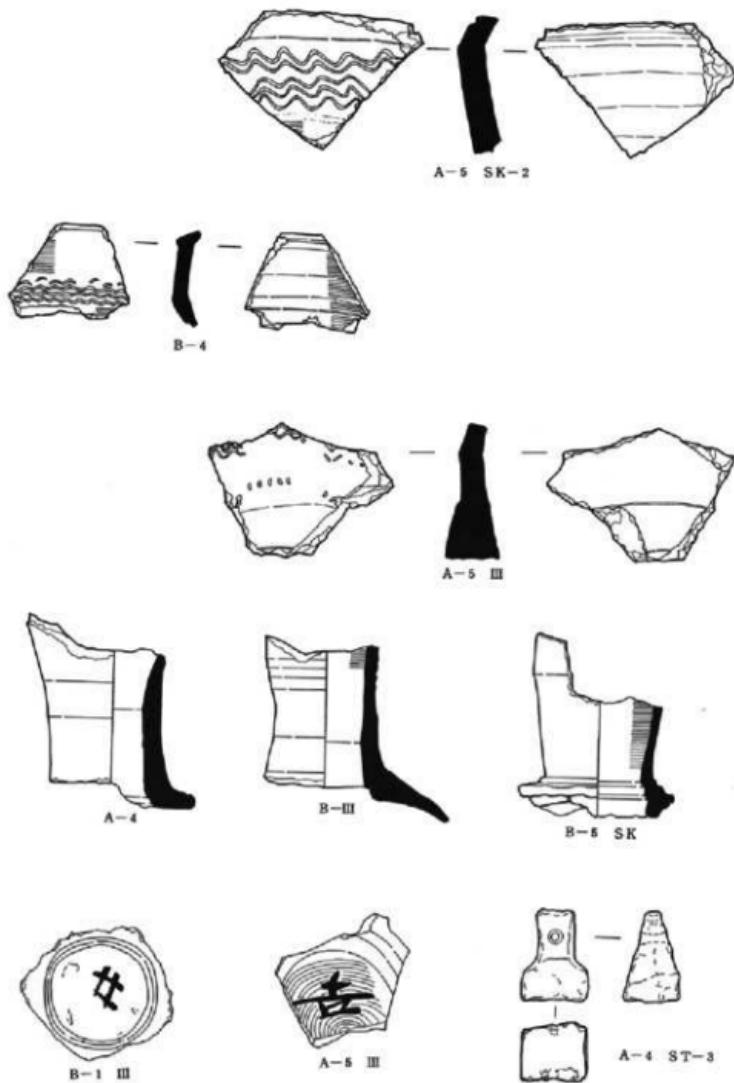
B-7 ST-2



B-7 SL-1

0 10 cm

第8図 実測図(3)



第9図 実測図(4)

土器出土地区分類表

C K H G D	坏	高台付 壺	壺	中型 壺	小型 壺	壺	瓶	壺	皿	蓋	手	ツ	マ	シ	脚	集	復	元
A—土 師 器	17	36	6	5		1										65	6	
A—須 惠 器	26	3	13			2	1				2	5			52	7		
A—黑色土器	5	2													7	3		
B—土 師 器	31	5	151	5	5						1				198	22		
B—須 惠 器	41	3	26			6					2	3	1	7	1	90	21	
B—黑色土器	10	4													14	7		
C—土 師 器	10														10			
C—須 惠 器	4						3								7			
C—黑色土器	1														1			
計	145	17	226	11	10	11	1	1	2	3	4	12	1	444	66			

V まとめ

月山堂遺跡の発掘は総面積2,800m²、精査面積は1,100m²で7月13日～8月31日まで実施され標高8.9mの底湿地帯である。塚の南端を基点として東西100m南北120mを調査区域とし、基点より南にA、B、C、と記号を付け、10mを基準に方眼状にテープを張り、2×10mのトレンチを設定し試掘の結果精査面積を決定する。表土は10～15cmで、2層の表面には土器の破片が散布して居り搅乱層に成っておる。以前の耕地整理の際に整地された事であろう。2層下10～15cmのところで遺構を発見しA-13地区で3棟、B-1地区で2棟が検出され柱間は1.5m～1.5m位の物で小規模の物が多く、カマド跡B-1地区3カ所検出され、建物は重複して居り数十年に渡り建替えられた事と推察される。B-6井戸跡1基検出され、直径1m深さ1.3mで側壁にタケのタガ1本検出され、井戸底には玉石が敷かれてありその他遺物なし、推定年代はかなり後期になると思う。

出土する土器は土師器、須恵器が多く大半を占めるが、分類の結果土師器260個、須恵器120個その他地区外出土120個、器種は壺、甕、壺、甕、皿、等で祭祀用のものは少なく一般庶民の生活用具が大半である。奈良～平安時代の農耕に従事した人達の集落の跡と確定される。集落の広さは約東西300m～南北200mに及ぶ隋円形状に散在して居た事と推定され戸数も30戸～50戸程度と思う。

56年7月一の坪発掘による墨書き土器の中に、大山郷と書かれた壺の破片が検出され、貴重な資料となった。今から約1,200年前、和銅5年9月（712）越の国より出羽國独立、和銅5年10月陸奥国より最上、置賜、出羽に編入、と古文状に記されて居り、大山郷とはこの時代に名付られた呼称である事が明かになり、出土品の貴重さが知られる。尚詳細は今後の研究を俟つことにする。

今回の調査で古代農耕文化の集落の範囲を解明する上で貴重な資料を得た事と言えます。月山堂遺跡発掘調査に当り、県文化課、村山西部土地改良事務所、西村山郡大堰土地改良区の各関係機関の御協力を得て、御厚意誠に厚くお礼申し上げます。又調査中は多くの方々の温かい御支援とご協力を賜りましたことに感謝の意を表します。尚宮城県多賀城市、東北歴史資料館の御指導を戴き厚く御礼申し上げます。

図 版

図版 1



▲ 嵌入式

▼ B地区トレンチ作業



▼ A調査地区荒操作業



図版 2



◀ 精査作業

▼ 壺の破片



▼ 錫器の破片



▼ B地区古銭



図版 3

町民参加発掘日



▲ B地区の井戸跡



▲ 現地説明会風景



图版 4



A-14 III



A-13-7 SL-1



B-7 ST-1



B-6 SE-2 III



B-7 ST-2



B-1 ST-13 II



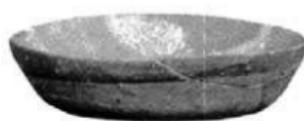
B-6 ST-11



A-13-7 SL-3



A-13-7 SL-2



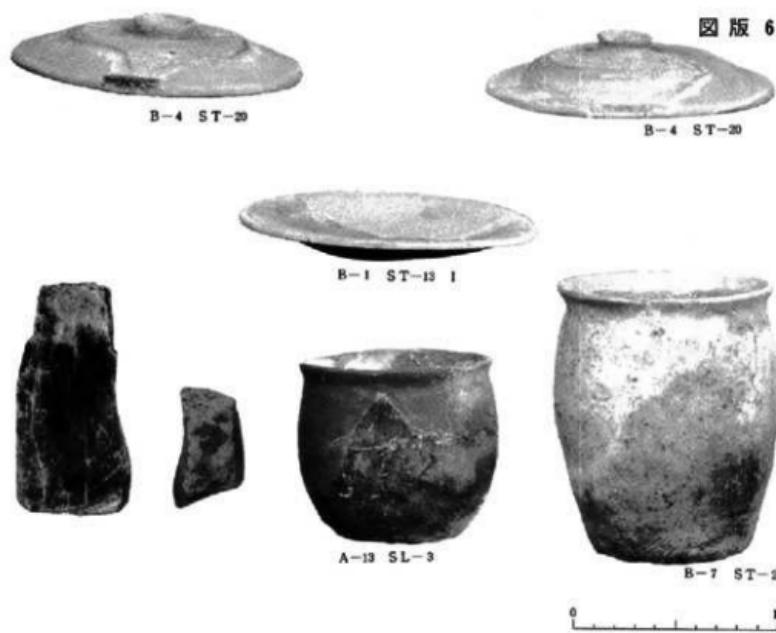
A-15 III



圖版 5



図版 6



河北町埋蔵文化財調査報告書第3集

月山堂遺跡
発掘調査報告書

昭和57年3月29日印刷

昭和57年3月31日発行

発行 河北町教育委員会

印刷 岩田宮印刷所